

A 家族・家庭と子どもの成長 B 食生活と自立

運営責任者 橋本 淳子 (石巻市立住吉中学校)
司会者 今野 房子 (塩竈市立第一中学校)
記録者 狩野 祐子 (栗原市立栗駒中学校)
参加者 34 名

1 はじめに

栗原地区では、地区内共通の指導計画を作成し、県の研究テーマをもとに各校の実態に合わせて授業を行った。幼児との触れ合い体験から、これまで支えてくれた人々との「つながり」について気付かせ、家庭生活や社会生活の関連について明確にして、将来的実践についての学習活動を探った。

仙台地区では、県の研究テーマをもとに、「つながり学習」の「生かす」に焦点を当てて研究を進めた。食に関する学習で、調理体験に乏しく、自分一人で食品を用意する経験がほとんどないという実態をもとに、よい食品を選ぶ力と意識を高めさせたいと考え、食品の選択に関して「つながり」を生かす指導の工夫に取り組んだ。

2 分科会の概要

(1) 実践発表

① 栗原地区

<「気付く段階」での実践事例>

「幼児との触れ合い体験」の事前指導として、幼児の心身の発達の様子が分かるDVDの視聴を行わせから、個々の目標設定をした。

<「考え、学ぶ段階」の実践事例>

班で考えた遊びから、予想される成果や課題についての相互評価をし、改善策などを考えた。より充実した触れ合い体験を目指し、幼稚園の先生と綿密な打ち合わせを行った。事後評価として、園長先生から講評をいただいた。

<「生かす段階」の実践事例>

学んだこと発表したり、掲示することで、体験の共有をさせた。「触れ合い体験」を通して、活動の前後で幼児に対する生徒たちの意識の変容を見取ることができた。

さらに家庭地域とのつながりを深めるために、級通信や市内の新聞店が発行する「地域新聞ニュース」に掲載してもらい、自分が役に立ったという肯定感を持たせ、今後も主体的に関わっていこうという意識を持たせた。

② 仙台地区

<擬似体験的な内容の授業の工夫>

実際のスーパーの映像を見せ、生鮮食品を選択する場の設定を行った。食品がどのように販売されているかを映像で見ることで疑似体験をし、興味・関心を高めることができ、視覚的にも選ぶポイントをとらえることができた。

<加工食品のパッケージを調べたり、体験する授業づくり>

パッケージに書いてある情報を一つ一つ調べることにより、情報に込められていることを深く知ることができ、関心・意欲を高めることができた。さらに、同じ食品でも加えられている添加物の違いを調べた。実際の購入で、表示を見るという行動に結びつけることにつながる授業を行った。

(2) 討議の内容

① 栗原地区の実践に対して

・1学年5～6クラスの学校なので、触れ合い体験学習を受け入れてくれる幼稚園がないのが実情である。授業で作った幼児の喜ぶものを子育てサポートセンターでプレゼントをする予定。
Q：幼稚園児を中学校に招待した学校の規模はどれくらいなのか。

A：1学年2クラス。すぐ近くに幼稚園があるので、来てもらうことができた。

・前任校では1学年6クラスあったが、近くに保育所があったので行くことができた。現在は、カリキュラムを組むことが難しいので、実施していない。

Q:栗原地区で実施していない学校の理由は何か。

A:非常勤講師なので、カリキュラムを組むこと、時数を調整するが困難で実施していない。

② 仙台地区の実践に対して

・生徒たちが、実際自分の家でもすぐ実践できるような内容であった。体験をして感じたものは、とても大きなものである。調理実習の後に、家で

どのように実践したか書かせてみたところ、味付けを変えたり、材料を変えたりという工夫をしていた。この授業を受けて、生徒たちも実践してくれるであろうと思う。

3 指導助言

(1) 栗原地区の発表について

助言者 高橋 彩子 先生

少子化の中、触れ合い体験を実施することが難しくなっている。「子どもの成長」の分野をどのように指導をしていくか考えることが大変である。体験は生徒たちにとって大きな効果がある。体験の場を設ける工夫をしていかなければならない。

栗原地区は、地区で統一した指導計画を作成し、自校化した題材で取り組んでいる。そして互いに情報交換をし、指導研究にあっている。授業実践を行い、さらに触れ合い体験の追跡調査を高校生に行っている。経験した子どもたちが積極的に関わろうとしていることから、触れ合い体験は教育的効果があることが分かる。さらに、事後指導として新聞店の協力も得て地域に発信している。

幼稚園児に対しても効果が大きいので、一度行うと次回への受け入れにつながっていくので、実施できるように教師側で開拓していくことも必要であろう。

地区の中で共有している年間計画や指導案などを活用し、これからも高め合うものにして研究を進めていってほしい。

(2) 仙台地区の発表について

助言者 菅野 玲子 先生

食生活については生徒達の興味関心が高いものの、ものが豊富、ファーストフードなどがたくさんある中、食生活の実態は各家庭によって様々で、整っている状況ばかりではないのが現状である。生鮮食品については授業の中で扱うのは非常に難しい。疑似体験的授業を行い、先生が撮影したものを ICT 活用したことで、子どもたちの疑似体験が学びとして深められたであろう。

題材構成に工夫がなされている。指導計画、教材、ワークシートがうまくリンクして生徒達の学びが深まっている。今後、周囲にある情報をうまく選択して、消費活動に関わっていくことが、これからの生活の中で大切になるであろう。アクテ

ィブラーニングを活用して、これからも授業構成を工夫して指導にあたってほしい。

4 成果と課題

① 栗原地区

具体的な手立てを用いることによって、生徒の幼児に対するとらえ方や関わり方に変容が見られた。また、高校生を対象とするアンケートから、中学校時代の実践的な体験が、年月を経ても知識や技能が実際の生活に生かされていることが分かり、触れ合い学習の成果が実証されたと考える。

このことから、学習内容を生かす場面をしっかりと設定したり示すことが、生活を工夫しようとする意欲や、生活で活用できる力の育成に結びつくものと考えられる。

今後の課題として、教育効果が高いと示されながらも、「幼児との触れ合い体験」の実施が難しいという現状を打破する方策を探っていくことがあげられる。家庭や社会とのつながりを重視しながら、この問題についてさらに研究を深めていく努力が必要である。

② 仙台地区

疑似体験を取り入れた食品の選択の学習では、買い物に行く場面をイメージしやすくなり、生活体験を広げることができた。加工食品の選択では、食の安全についても意識を向けることができた。また、消費者の観点から、よりよい商品を購入することが、環境によい生活につながることに関連させることができた。

食品のみならず、「選択する」という行為は生活の中心を占めるもので、家庭科では、消費者の視点を取り込んだ学習内容を組み立てていくことが必要であると思われる。「生かす」ことを意識しながら、実際に生活の中で直面した課題などに、学習した内容を将来に生かそうとする意識を高めることが重要であるので、今後も授業内容を工夫していきたい。